東洋文化研究所紀要 第一六七册
平成二十七年三月抜刷

豊子愷の描いた桃源譚――『赤心国』

大野　公賀

豊子愷の描いた桃源譚――『赤心国』

大野　公賀

はじめに

豊子愷（一八九八―一九七五）は近代中国を代表する文化人の一人で、「子愷漫画」と称される独自のイラストや『緣緣堂随筆』に代表される散文で広く知られている。豊子愷は散文を得意とし、また著述で生計を立てる以前は芸術教育にたずさわっていたことから、画集や翻訳を除いては、著作のほとんどが散文集、あるいは芸術に関する教育的著述である。

小論で取り上げる「赤心国」は、豊子愷の唯一の童話集『博士見鬼』（一九四八年、上海・児童書局）に収録されたものである。戦時下、豊子愷は家族や親戚一〇数名とともに中国各地に疎開したが、[1] 長女の豊陳宝によると、同作品は豊子愷一家が一九三九年から四二年まで貴州省遵義に滞在した頃に、豊家の子どもたち[2]の国語教育のために編み出された童話の一つであるという。豊子愷は戦争のために子どもたちの学業が遅れることを憂慮し、毎週童話を一つ読み聞かせてはそれを文章にさせ、自らが添削することで、子どもたちの国語教育の代わりとしていたのである。[3]

戦後、同作品はまず『論語　半月刊』（以下『論語』）第一三四期（一九四七年八月一日）に掲載され、次いで一九五〇年七月一日からは『亦報』に連載された。[4] これら二作は物語の細部や表現、豊子愷自身による挿絵に多少の相違はあるものの、大筋においては似通ったもので、戦時下、爆撃を避けてほら穴へと逃げ込んだ将校が、ほら穴の先に理想郷（赤心国）を見出すという、一種の桃源譚である。しかし、登場人物の性格や、この将校が現実世界へ戻る契機となったある事件の顛末、そして現実世界に戻ってからの将校の態度には大きな違いが見られる。これらの相違には、一九四七年と一九五〇年という時間の流れ、そしてその間の豊子愷の変化が影響していると考えられる。

小論では、これら二作の内容の比較を通じて、その相違と豊子愷の状況を明らかにするとともに、「赤心国」の発想に影響を与えたと考えられる陶淵明「桃花源記」との関係についても論じる。

一．二つの「赤心国」

本節では、『論語』と『亦報』に掲載された二つの「赤心国」につき、その相違を比較しつつ、「赤心国」の内容について述べたい。[5] 豊子愷は「赤心国」以外にも多くの散文やイラストを『論語』、『亦報』の双方に提供しているが、この二つの媒体が対象としていた読者層には大きな隔たりがある。

『論語』は一九三二年九月に章克標（一九〇〇―二〇〇七）や邵洵美（一九〇六―六八）、林語堂（一八九五―一九七六）らによって創刊された雑誌で、第一七七期（一九四九年五月）まで続いた。同誌は当初、邵洵美が投資していた中国美術刊行社から出版されたが、一九三三年一一月に邵洵美が同社の筆頭株主となってからは、時代図書公司と

社名を変更した[6]。『論語』と言えば、まず林語堂の名が浮かぶ程、林語堂の印象が強いが、林語堂が編集に直接関与したのはわずか一年程のことである。創刊当初は章克標や孫斯鳴が、また林語堂が第二六期をもって同誌を離れた後は陶亢徳（一九〇八―八三）が編集責任者を務めた。『論語』は、後に林語堂が創刊し、林語堂や陶亢徳らが編集にたずさわった『人間世』、『宇宙風』と同じく、商業雑誌でありながら、知識人を主たる読者とし、世俗を離れた上品さや優雅な趣を特徴としていた。

一方、『亦報』は一九四九年七月に唐大郎、龔之方が上海で創刊したタブロイド版新聞で、紙面の半分を文芸欄が占めており、小説のほかには日常の瑣事や、文学歴史に関する逸話などのコラムが多数設けられていた。同紙は上海の広範な市民を対象としており、張愛玲（一九二〇―九五）が梁京の名で発表した小説『十八春』（一九五〇年）や、周作人（一八八五―一九六七）が南京老虎橋監獄で執筆し、東郭生の名で豊子愷の挿絵を添えて発表された『児童雑事詩』（一九五〇年[7]）などが掲載されたことでも知られる。尚、豊子愷は周作人、張愛玲と並んで、『亦報』の三絶と称されていた[8]。

前述のように、「赤心国」はもともと、豊子愷が自らの子どもたちに読み聞かせた童話であるが、『論語』版「赤心国」は『亦報』版に比べて全体に表現が硬く、挿絵もわずか六点のみである。『亦報』は一般市民を読者対象としていたためか、言葉もわかりやすく、計三一点の挿絵が添えられている。そのほかにも、両者は段落や句読点の変化など細かな点を含めると、多くの点が異なっている。小論では、これらの細かな改稿点については考察せず、主としてプロットの変更、具体的には前述の三点、すなわち登場人物の性格、将校が現実世界へ戻る契機となった事件の顛末、そして現実世界に戻ってからの将校の態度について見ていきたい。

二．「赤心国」の概要および『論語』版と『亦報』版の相違

（一）主人公の性格

物語の主人公は、部隊を率いて海沿いの町に駐屯していた将校である。時代は、『論語』版では「抗戦時期」とあり、『亦報』版では「かつて、ある戦争の時」とされている。将校が壮年期にあることは文中に示唆されているが、名前や家族構成など、彼を特定するための要素は何も記されていない。『論語』版の将校は「危険に際しても動じることのない冷静さ、明晰な頭脳、不撓不屈の精神、苦労を耐え忍ぶ意志の力、生まれついて平和を愛する性質」に恵まれた人物である。一方、『亦報』版の将校は「勇敢で、我慢強く、正直で平和を愛する」人間である。一見したところ、二人の性格は似通っているようだが、『論語』版の将校が「平和」云々の箇所を除いては如何にも軍人らしいのに対し、『亦報』版の将校は素直さや優しさなど、人間らしさが強調されている。

二人の性格の相違は、それぞれの戦争観にも反映されている。『論語』版の将校が「将来、部隊を率いて敵を殺害する」ことに備えて、日々訓練を重ねているのに対し、『亦報』版の将校は「武力で敵の侵略を制止し、人類に平和で幸福な生活をもたらす」ために、日々努力をしている。『論語』版の将校にとっては戦闘、すなわち「敵を殺害する」こと、それ自体が戦いの目的であり、意味である。一方、『亦報』版の将校にとって、戦闘は「人類に平和で幸福な生活をもたらす」という究極の目的を実現するための、言わばやむなき手段なのである。

（二）豊子愷の戦争観

上述の「戦争の目的、意味」という根源的な問いは、抗戦期を通じて豊子愷を悩ませた問題である。戦争という非常事態において、戦闘や殺戮は不可避である。しかし、そうであるからこそ尚、豊子愷は戦闘や殺戮それ自体が目的化すること、つまり戦闘のための戦闘、殺戮のための殺戮となることを恐れていた。これについて、豊子愷は一九三八年の散文「一飯之恩　避寇日記之一」で次のように述べている。

我が中国は今まさに凶悪な敵の侵略を受けている。それは、あたかも人が病原菌に侵され、重病を患っているようなものである。病が重篤な場合は、劇薬を服用してはじめて病原菌に打ち勝ち、生命を取り戻すことができる。抗戦とはつまり一種の劇薬なのである。しかし、このような薬が服用可能なのは暫くの間だけであって、これは常用すべきものではない。病原菌が死んで、身体が徐々に元気を取り戻してきたら、滋養品やお粥を食べるように改めるべきである。そうしてはじめて、完全に健康な身体へと快復できるのである。滋養品やお粥とは何だろうか？それは平和、幸福、博愛、護生を旨とする「芸術」である。(9)

当時、中国を代表する漫画家の一人であった豊子愷には、当然、抗戦漫画の執筆が求められた。しかし、上記のような考えに基づいて描かれた豊の作品は、いずれも戦意を高揚させるようなものではなかった。抗戦漫画の目的が戦意高揚にあるとするならば、豊子愷の作品は抗戦漫画というよりも、むしろ反戦漫画と呼ぶべきものであった。Chang-Tai Hung の指摘するように、豊子愷が「銃と音楽を並べて描くのは、戦争を推し進めるためではなく、平和を生み出すため」であった。そして、そうであるが故に、豊子愷は「戦争と平和の際立った相違」を描き続けたので

ある。[10]

一九五〇年に発表された『亦報』版「赤心国」では、豊子愷の抗戦期の多くの作品と同様に、戦争の目的は「平和で幸福な生活」の実現にあるとされた。しかし『論語』版では、このような記述は見られない。これは、『論語』の想定する読者層が知識人であったのに対し、『亦報』では広範な市民が対象とされたことに拠るための相違とも考えられる。しかし、同時にまた、『論語』版「赤心国」が一九四七年という内戦期に発表されたことも、併せて考慮すべき要因の一つであろう。

（三）ほら穴の先の理想郷――赤心国

さて、「赤心国」の将校は、前述のように海沿いのある町に駐屯していた。この地域は前線に近く、敵機の往来が激しい。ある夏の日、敵の襲来が始まり、将校は付近の住民とともに、山のほら穴へと逃げ込んだ。このほら穴は非常に大きく、また果てしなく続いているため、地元では「底なし」と言われている。しかし、奥まで踏み入った者はおらず、その実態は誰も知らない。爆撃がほら穴の入り口に及ぶに至り、人々は将校を先頭にさらに奥へと進んでいった［図版①］。

将校らが先へ、先へと歩を進めていた丁度その時、爆撃によってほら穴の上にあった巨大な岩石が落下し、ほら穴は前後二つに断ち切られる。その直後に将校が後ろを振り返ると、将校の後をついて来た住民は皆、岩石に押しつぶされ圧死していた。岩石によって退路を断たれた将校はただ一人、先の見えないほら穴に取り残されてしまう。

将校は絶望のあまり、一度は自殺を考えるが、気を取り直し、道の続く限り先へ進もうと決意する。暗闇のなか、

【図版①】

およそ一昼夜、二〇数キロを歩き続けた将校は、疲労と空腹のあまり昏睡状態に陥った。長い眠りから目覚めた後、将校は一筋の光を見つける。光の方向へと進むにつれ、ほら穴は次第に細まって行き、ついに人が一人ようやく通れるぐらいの細い穴へたどり着いた。その先には一面の平原と洋々たる大海が広がっており、将校は喜び勇んで外に出ようとして、なぜか突如その動きを止めた。

将校がほら穴の隙間から目にしたのは、平原を行き来する「野人」の如き生き物であった。彼らがその場を立ち去らないことに業を煮やした将校は、ポケットのピストルを確認すると、やおら外へと飛び出した。ただし、この時、将校は決して彼らを殺傷するつもりではなく、彼らが凶暴であった場合はピストルで脅し、身を守るつもりであった。

（四）赤心国の社会と人々

将校の心配とは裏腹に、彼らは非常に友好的で礼儀正しく、将校を客人として迎えると、食事をふるまい、住居を提供して

くれた。彼らは皆、心優しく善良である。棕櫚で編んだ服を身につけ、ジャガイモを主食とし、山肌に穿った横穴に暮らしていた。[11] 住民はあわせて五百名で、一名のリーダーと六名の実務責任者という七名の指導者の下、皆がともに働き、ともに食事をし、食後には皆で歌や踊りを楽しむ。彼らは自給自足の生活をおくっており、質素ではあるが、誰もが満ち足りた気持ちで暮らし、見事に調和のとれた、平和で安定した社会が営まれていた。[図版②]

この理想郷の住民には外見上、二つの大きな特徴がある。一つは、彼らが皆、全身長毛で覆われていることである。[12] 将校がはじめ彼らを「野人」と見なしたのは、このためであった。もう一つは、「心」が身体の外に大きく突出していて、目で直接見たり、手で触ることもできる点である。「心」の大きさは人によって違うが、それでも皆、普通の人間よりは大きな心を持っている。[13] そのなかで最も大きな「心」を持つ者がリーダーとなり、その次に大きい者たちが責任者となる。指導者を選ぶのに、ここでは推薦や選挙は不要である。「心」の大きさは衣服の上からも胸の高さではっきりと識別されるので、誰が指導者として相応しいのかは、誰の目にも自ずと明らかなのである。[図版③]

主導者の名称は、『論語』版と『亦報』版ではそれぞれ「国王」、「首領」と異なるが、「国王」も世襲制ではなく、選ばれる基準は同じである。指導者の「心」が小さくなると、彼らは指導者の地位を降り、彼らよりも「心」の大きい者が次の指導者となるのである。彼らのこうしたシステムは、赤心国の人々の「心」のもつ、ある特別な働きに由来している。

六人の責任者はそれぞれ衣類の製造、ジャガイモやサトウキビの生産、海塩や土器の製造、薪の採集を管轄する。労働は強制や命令によるものではなく、誰もが責任者の指導に従って与えられた仕事を真面目に行い、怠ける者は一人もいない。食料や衣類は、それぞれの必要に応じて、必要なだけ与えられる。必要以上に欲しがる者も、そのため

【図版②】

【図版③】

に争う者も存在しない。

（五）赤心国の原型――立達学園

上述のように、赤心国はお互いの信頼の上に、お互いに尊重し合い、助け合う社会である。指導者層こそ存在するものの、それはあくまでも機能としての役割であって、人々は皆、完全に平等である。

このような赤心国の組織形態は、豊子愷が一九二五年に春暉中学の同僚であった匡互生（一八九一―一九三三）や朱光潜（一八九七―一九八六）らと創設した立達学園の理想と極めて相似している。

以下、赤心国の原型ともいうべき、立達学園について簡単に見ておきたい。まず、「立達」という名前は、『論語』「第三　雍也第六　三〇」の「夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人（そもそも仁者は自分が世に出たいと思えば、まず他者をそのようにさせる。自分が目的を遂げたいと思えば、先に他者をそのようにさせる）」に由来する。[14]

この「己欲立而立人、己欲達而達人」という言葉はまた、中華民国初代教育総長であった蔡元培（一八六八―一九四〇）が一九一二年の「教育方針に対する意見」において、教育宗旨として掲げた五項目「軍国民教育、実利主義、公民道徳、世界観、美育」のうち、「公民道徳」の綱領の一つ「友愛」を説明する際に用いたものである。豊子愷ら立達学園の創設者たちは、同校が「友愛」に満ちた、穏やかで平和な教育の場となることを望んで、「立達」という言葉を用いたのであろう。

立達学園では学生の主体性が重視され、教師と学生は互いに一個の独立した人間として平等な関係にあった。例えば、同校では校長を置かず、立達学園の支援組織である立達学会の推薦する五名から成る導師会（任期五年）が学生

生活や学校の発展などに責任を負い、そのうちの一名が主任として対外交渉を担当することになっていた。導師会以外には訓導会、教務会、事務会などがあり、それぞれの職務を担当した[15]。

また、立達学園では「健全な人格の修養と互助的生活の実行、そしてそれによる社会の改造と文化の促進」を趣旨としていたが[16]、この「互助的生活」を実行すべく、立達学園では教師や学生による工場や農場での労働を重視していた。これは、特に匡互生の意向を強く反映したもので、匡互生や豊子愷の学生で、彼らを慕って春暉中学から立達学園に転校した魏鳳江は、匡互生が春暉中学当時から農場や農業科の付設を計画していたと記憶している[17]。

立達学園には農場や農村教育科も設置されており、農場には養蜂場や養鶏場、果樹園、菜園、養魚地があった。新式の設備で新品種を生産し、創設当初は立達学園の兄弟組織であった出版社、開明書店の雑誌『中学生』などに広告を掲載して卵や蜂蜜、蜂の巣、蜜蜂の販売も行っている。当時、立達学園では経済的に余裕のない学生には学費を免除するなど、特別措置を講じており、学校運営は厳しいものであった[18]。農村教育科の設置や農場拡大の背景には、農業生産を本格化することで生産収入を上げ、学園の運営費に充てるという目論見もあったのかもしれない。

豊子愷が実際に立達学園の教育、運営に関わったのは、一九二五年の創設から一九二八年に西洋画科が停止されるまでの数年間だけである。短い期間ではあったが、豊子愷は創設者の一人として、学園の趣旨に忠実に、学生の個性や自主性を尊重し、すべての人間が自由で平等な人間として相互に信頼し、協力し合うような社会の実現を目指し、全力を尽くした。

豊子愷にとって、立達学園は自由で平等な「個人」の育成と、それら多様な「個人」の共存する社会の実現という漠然とした理想が、匡互生や朱光潜という同志を得て、一つの形に結実したものであった。その後、一九三三年に匡

互生が病死すると、立達学園では以前から見られた理想教育派と国民党右派との対立がさらに顕著なものとなった。これを機に、豊子愷は一九二八年以降も務めていた同学園校務委員を辞し、匡互生派の同僚らとともに同校を完全に離れた。

（六）鍵やお金の存在しない世界

さて、赤心国に戻ろう。将校はここで数ヶ月暮らすうちに、次第に彼らの言葉を覚え、意思の疎通にも困らなくなった。将校は彼らの社会を知れば知る程、その平和で秩序ある生活に憧憬を覚え、心から賞賛を送るようになる。そうしたある日、人々は将校の持っていた鍵を見て大いに興味を示す。彼らは鍵というものをはじめて見たのである。赤心国にはそもそも窃盗という概念自体が存在しない。

鍵をかけることの意味を聞かれた将校は、気まずい思いをしながら「私たちの世界の人間は、あなた方のように優れてはいないので、トランクには必ず鍵をかけなくてはいけないのです。鍵をかけないと、悪い奴に盗まれてしまいます。もし、私のトランクの服が盗まれたら、私は着る物がなくなり、寒い思いをすることになります。だから、鍵をかけない訳にはいかないんです」と説明した。

それに対して、赤心国の首領（以下、『論語』版では国王）は「まさか、あなたが（服を盗まれて）寒く感じるようになったなら、服を盗んだ人はもう寒くはない、ということではありませんよね」と尋ねた。将校は首領の言葉の意味が分からず、「私が寒く感じたら、どうしてほかの人まで一緒に寒くなるんですか。泥棒は私の服を盗んで、それを身に着けるんですから、むしろ暖かくなりますよ！」と答えた。首領に、さらに「あなた方の世界は本当に奇妙

ですね。誰かが寒いと思っているのに、どうしてほかの人は誰も寒さを感じず、逆に暖かいのですか」と尋ねられ、将校は「自分は自分、他人は他人。何の関係もありませんよ！私が寒いのは、私の服が盗まれたからです。ほかの人は服を盗まれていないのだから、寒くなる筈がありません」と答えた[19]。

ここに至り、首領と将校ははじめて、お互いの世界の違いを明確に認識する。赤心国では、もし五百人の住民のうち一人でも寒いと感じれば、残りの四九九名も皆、同様に寒さを覚える。それは、彼らの「心」（赤心）には、人の気持ちをまるで自分のことの様に感じる働きがあるからである。首領は赤心国の住民のなかで最も大きな「心」を持っているため、ほかの人の気持ちに対する感覚も最も鋭敏で、住民の間で何か事件が起こった場合には、それを一番に感じる。逆に言うならば、他者の気持ちに最も敏感な者が、全員の同意のもとに首領となるのである。

将校の世界を奇異に思った首領は、将校に鍵のほかには自分たちの世界にない、どんな不思議なものを持っているのかと尋ねた。将校が紙幣を取り出すと、人々はまた大いに驚き、興味を示した。赤心国では自他の区別がなく、全員がお互いの感情を共有し、すべての人に必要なものが必要なだけ与えられる。そのため、赤心国には鍵もお金も存在する必要がないのである。鍵やお金に実用的な意味を見出し得ない彼らにとって、それらは精巧につくられた芸術品や玩具に等しく、ただ無心に眺めて楽しむための物でしかない。将校はそれまで、お金はこの世で「最も重要なもの」[20]と考えてきたが、彼らにお金の意味を説明するうちに、自分さえ良ければという、自分たちの世界はなんと利己的な社会かと慙愧の念に苛まれるようになる。

（七）匡互生の影響と大同思想

次に、豊子愷が「赤心国」に求めた理想について、大同主義の側面から考察したい。前述の立達学園や同農場での活動にも明らかなように、匡互生の思想には中国の無政府主義者に共通して見られる大同思想的な要素が強く反映されている。[21] 無政府主義や大同思想に関して、豊子愷は直接には何も記していない。しかし、匡互生との交際や立達学園の性質などから、豊子愷が平素からこうした思想にふれ、そして共感を寄せていたであろうことは想像に難くない。

豊子愷のこのような思想傾向は、当時の散文からもうかがわれる。一例として、一九二七年の散文「東京でのある夜の出来事」を見てみたい。これは、豊子愷が一九二一年に東京に一年弱、遊学した時のことを綴ったものである。ある日、同じ下宿の中国人留学生数名と神保町に散歩に出かけた折、見知らぬ老婦人から突然、荷物を運んでほしいと頼まれ、一同大いに困惑したという話であるが、豊子愷は最後にこう記している。

この老婦人の言うことは、そもそも矛盾しており、またあまりにも唐突である。しかし、私はむしろ、こう想像してみた。この老婦人が希望するような世界、つまり天下は一家の如く、人々は家族の如く、お互いにお互いを大切に思い、お互いに助け合い、生活をともに楽しむ、そのような世界が本当に存在しうるならば、見知らぬ他人ばかりの路上は家庭へと変化し、この老婦人は決して矛盾したことを言っている訳でも、唐突なお願いをしている訳でもなくなる。これは、なんと憧憬すべき世界であろう！[22]

豊子愷はまた、このような考え方をさらに発展させて「全人類は家族である」という散文を発表している。これは、一九三七年に豊子愷が家族とともに疎開した際に書かれたものである。当時、しばしば「今の時代には独身の人間が

一番幸せである。疎開するのに便利なこと、この上ない」というような言葉が口にされていた。それに対して、豊子愷は次のように反論している。

いわゆる「独身の人間が一番幸せである」とは、自分の面倒さえ見れば、他人のことは構わなくてもよい、という意味である。（後略）

しかし、その人が同情心に満ちた人ならば、決して自分は幸せだと感じることはなく、ほかの人と同様に苦痛を覚えるだろう。なぜならば、我々の愛は無限に拡大しうるものだからである。家族から始まり、友人へと広がり、更には郷、地域、国、民族および全人類にまで拡大し、さらにまた禽獣や草木にまで押しひろげることも可能なのである。[23]

豊子愷が上記二文で記した理想社会は、赤心国に通ずるものである。ここに記された他者への共感や、自他の区別の排除という考えは、豊子愷が生涯を通じて提唱した「護心思想」の基本をなすものである。同思想には儒教や道教、仏教など、様々な要素が含まれるが、匡互生の無政府主義や大同思想の影響も重要な要素の一つと考えられる。

（八）ピストル発砲事件

さて、前述のように赤心国では、人々はお互いの感情を「心」で自然に共感し合い、そこには自分と他人という区別が存在しない。将校にとって、それはまさに「理想的な世界」であり、人々の苦痛を自らのこととして最も強く感じる首領は「理想的な素晴らしい指導者」あった。将校は、かつて彼らを「野人」と見なしたのは彼らに対する冒涜で、実は自分たちこそが「野人」だとさえ思うのである。

【図版④】

将校にとって今や、鍵や紙幣は恥ずべきものであったが、それ以上に彼らに知られてはならないのが、「お互いに殺害しあう」ための道具、すなわちピストルの存在であった。[24] 将校は彼らに見つからないように、ピストルを用心深く隠していたが、ある日ふとした不注意から見られてしまう。殺人という概念のない赤心国の人々は、純粋にその精緻な美しさを褒め称え、将校にその用途を尋ねる。迷った将校は思わず、「結婚式の時に使う装飾品」だと答えてしまう。[25]

赤心国の人々や暮らしに慣れるにつれ、将校は次第に、このまま赤心国で彼らとともに平和に暮らしたいと考えるようになる。しかし、その後に生じた、住民をめぐるいくつかの事件は、将校が結局はこの世界の真の住民とは成りえない余所者であることを示唆している。

赤心国では住民の誰かが不注意や事故によって、誰も知らない所で一人、寒さや空腹、孤独や不安に打ち震えていると、それは「心」を通じて自然に、首領から責任者へ、そしてほかの住民たちへと伝わり、当事者が助け出されるまで続く。全員がその苦し

さや悲しみを共有している場にあって、将校だけは何も感じることができない。将校が赤心国の人々にどれほど受け入れられ、またどれほど彼らに同化したいと願おうとも、将校はやはり外部の人間でしかないのである。

将校はこの事実を恥ずかしく思う一方で、また「私には彼らのような赤心はないが、できる限り、一生懸命に彼らを見習おう」と決意を新たにする。[26] こうしたある日、赤心国では収穫祭が開かれ、将校も招待される。そして、皆にあの「美しい装飾品」を身に着けるよう依頼され、将校はやむなくピストルを取り出して住民たちに見せた。[図版④]

続けて、『論語』版と『亦報』版ではそれぞれ、国王がピストルを将校の首にかけた時、あるいは首領がピストルを手に取って眺めている時に誤って発砲し、将校は喉を撃たれて出血のあまり意識を失う。

しかし、その後の将校への対応をめぐって、『論語』版と『亦報』版には相違が見られる。『論語』版では、将校がこれほどの傷を負っているにも関わらず、国王はじめ住民の誰も痛みを感じないことから、国王は改めて、将校は自分たちとは別の世界に属する者であり、自分たちとは関係のない者だと宣言する。国王は、将校が現れたほら穴について、代々の王の間では、その穴は外の「良くない世界」に通じているので決して中を覗いてはいけないと言い伝えられてきたが、逆に人々の好奇心をかきたててはいけないので、その詳細はこれまで秘密にされてきたことを明らかにする。国王は当初、将校が悪者ではないかと心配していたが、実はそうではなかったことを認めながらも、彼が「良くない世界」の住人であるが故に、自分たちに不幸をもたらしうる者として、彼らの死者を葬る習慣にしたがって海へと流し去るよう、住民に指示した。

赤心国にはそもそも病気や怪我というものがなく、死はすべて老衰による。そのため、かりに将校が生きていたとしても、彼らには将校の傷を治療する手立てもなく、またそうである以上、もはや将校を海に流すしか方法はなかっ

【図版⑤】

たのであろう。あるいは、かりに将校の命が助かったとしても、赤心を持たない将校がこの国で生きていくことは不可能であろうという思いの故かもしれない。しかし、それ以上に、彼らにとって将校は、たとえ彼自身は悪い人間ではないとしても、自分たちの平和を脅かす可能性を帯びた危険な存在であり、自分たちの世界から抹消すべき者であった。将校は意識の薄れ行くなか、人々に向って、どうにかして赤心国に留まりたい、自分は「良くない世界」から来たけれども決して悪い人間ではないと伝えたいと思いながらも言葉にならず、ただ海へと流されていく。［図版⑤］

『論語』版では、国王らは将校は自分たちに関係のない者だとしながらも、まだ命のある将校が深い傷を負ったまま海へ流され、やがては亡くなるであろうことに深い哀しみを覚える。それに対して『亦報』版では、将校はすでに亡くなったと思われており、殺人の道具であるピストルを装飾品と言って、自分たちを欺き、結果的にそれで自らの命を絶ってしまったのだから、将校の死は言わば自業自得で、自分たちには無関係であり、

将校を可哀相だと思う必要はないとされる。そして『亦報』版でも、将校は赤心国の人々に向って、自分は彼らに害を加えるつもりはなく、侵略者の爆撃を逃れてやって来たのであり、どうか赤心国の「同志」にしてほしいと心中深く願うが、この気持ちが赤心国の人々に共有されることはなかった。

『論語』版では、将校を別世界の人間としながらも、彼の死に際して哀しみを覚えるなど、同情的である。しかし『亦報』版では、将校は別世界の人間であるばかりか、存在自体が完全に否定されている。この相違は、いったい何によるものであろうか。赤心国と現実社会を主義、思想の異なる二つの世界と見なした場合、国共内戦を経て、中華人民共和国となってから発表された『亦報』版では、国共内戦期に発表された『論語』版よりも、この二つの世界を互いに相容れない、完全なる別世界として描き分ける必要があり、一方から他方への同情や共感を描くことの許されない状況にあったのではないだろうか。

前述のように、「赤心国」が『亦報』に最初に掲載されたのは一九五〇年七月一日のことである。中国共産党は同年五月、国内での政権掌握を確実なものとするための「整風運動」を開始した。六月には「中華人民共和国土地改革法」が公布され、土地改革が押し進められた。また同年七月には、「反革命活動の鎮圧についての指示」が提出され、「反革命分子」の鎮圧が開始された。こうした一連の動きは、中国共産党が党内を引き締めるとともに、朝鮮戦争の勃発に呼応して、大陸に残っている国民党の残存勢力が「反攻」に出ることを防止するために国民党残存勢力を一掃しようとの意図によるものであった。

こうした状況下においては、赤心国と現実社会がそれぞれ国民党、共産党、あるいはそれ以外の勢力のいずれを象徴するかに関係なく、豊子愷のように公的立場にあった人間にとって、自らの旗印を鮮明にし、共産党に追求される

余地を残さないことが、自分と家族を守るためには不可避であったのだろう。

（九）現実世界への回帰

将校は赤心国の風習通り、板に身体を縛りつけられ、海へと流された。海上を漂ううちに大きな船に見つけられ、幸いにも一命を取り留め、現実世界へと戻っていく。『論語』版と『亦報』版では、その後の将校にも明らかな相違が見られる。

将校はその不思議な体験を人々に語って聞かせる。爆撃のせいで将校は狂ってしまったのだという人もいれば、将校の言うことを信じ、自らも船を出して赤心国を探しに行くと言う人もいた。『論語』版では、将校は人々が信じようと信じまいと、意に介することなく、いつまでも赤心国での平和で幸福な生活に憧れをいだき、自分たちの社会が赤心国のようになるにはどうすればよいのか、ただひたすら改良の方法を考えている。『論語』版では戦争の終結については何も語られていないが、『亦報』版では将校が赤心国に滞在していた七、八ヶ月の間に戦争は終わっていた。将校が赤心国での暮らしを懐かしみ、自分たちの社会を赤心国のように改良したいと願っている点は『論語』版と同じである。［図版⑥⑦］

しかし、『論語』版の将校が周囲とは距離をおいて、一人でただひたすらに改良方法を思索しているのに対し、『亦報』版では将校はどれほど馬鹿にされようとも、会う人、会う人すべてに赤心国の素晴らしさを語り続ける。そして『論語』版との最大の相違は、『亦報』版では多くの人が将校の言うことを信じ、社会を改造したいという彼の願いは必ず実現可能であり、しかもそれは、さほど先のことではないと励まし、慰めてくれる点である。

【図版⑥】

【図版⑦】

『論語』版、『亦報』版ともに、将校は一部の人々から狂人扱いをされるが、少しも意に介してはいない。その姿は、『護生画集』[27]の内容をめぐって、曹聚仁（一九〇〇―七二）や柔石（一九〇二―三一）らからの誹謗や批判にも臆することなく、自らの信念のままに作成を続けた豊子愷自身のようでもある。

（一〇）「赤心国」執筆当時の豊子愷

以上見てきたように、「赤心国」には豊子愷の理想が描かれているが、それは現実社会に対する批判でもあった。前述のように、豊子愷は一九三七年から中国各地で疎開生活をおくり、一九四六年九月にようやく上海に戻って来たが、当時の上海は混乱を極め、著しい無秩序状態にあった。

終戦後、国民党の軍隊や官僚は北京や上海、天津、南京などの大都市に戻ると、それまで日本軍や漢奸の管理下にあった工場や倉庫、交通手段、物資などを悉く接収した。一九四六年の夏に内戦が始まると、国民政府は膨大な赤字財政を補填するために法幣を無制限に乱発した。その結果、すさまじい勢いでインフレが進行し、一九四七年末には物価は開戦前の一四万五千倍にまで上昇した。原料と運転資金に窮した民族資本工業は次々と倒産し、農業の生産低下もあって、国内には失業者や餓死者があふれた。

このような状況下、一九四六年一一月には上海で大暴動が発生した。また、一九四七年五月には共産党組織の指導下、北京や天津、南京、上海などの各地で「反飢餓、反内戦、反迫害」をスローガンとする学生デモ（五・二〇学生運動）が起こり、国民党は軍事警察を投入して、「社会秩序維持弁法」を制定するなど、弾圧政策を取った[28]。

抗日戦争の終結と前後して、重慶では国民政府の検閲に対する拒否運動が始まり、その動きは成都、昆明、桂林、

西安、上海、北京へと広がっていった。それを受け、国民政府は一九四六年夏に上海での検閲廃止を宣言した。また戦争終結後は、社会全体が戦時の緊張状態から解放され、読者が新しい情報や娯楽性の高い読み物を希求したことから、統制緩和の機運が見られた。

しかし、一九四七年七月には蔣介石が「匪賊討伐のための総動員宣伝計画綱要」（国家統一と憲政実施を妨害する共匪の徹底的潰滅のための言論統制強化案）を法制化するなど、再び言論の統制が進み、左翼系知識人の間では共産党を支持する動きが高まった。

このような状況下、豊子愷一家は一九四七年三月には上海を離れ、第二の故郷である杭州へと転居した。しかし、杭州も決して安住の地ではなく、豊子愷は早くも翌年九月には家族を連れて上海に戻った。同二七日に古くからの友人で、開明書店社主の章錫琛（一八八九―一九六九）が同台湾分店の視察に赴くにあたり、豊子愷も娘の一吟や章錫琛の家族とともに台湾を訪れた。同地には開明書店の友人や、立達学園当時の教え子も多く、豊は同年一一月後半まで約二ヶ月滞在した。この間、豊子愷は台湾各地を旅行し、珍しい風俗や景色を写生する一方、台北中山堂で個展を開き、またラジオ講演なども行っている。

豊一吟によると、豊子愷の台湾訪問の目的は同地の視察にあり、豊子愷は「天の時、地の利、人の和が合えば、一家を挙げて移住するつもり」であったという。しかし、台湾もまた、満足のいく場所ではなかった。その理由として、豊一吟は台湾のお酒が豊子愷の好みに合わなかったためだと述べている。[29] 故郷浙江省の紹興酒を深く愛した豊子愷にとって、これもまた一因ではあろうが、一九四七年の「二・二八事件」以降、台湾全土に張り巡らされた監視や摘発など、国民党の軍事支配と恐怖政治も重要な理由の一つと考えられる。

その後、厦門に戻った豊子愷は同地への移住を計画し、一九四九年一月には杭州の家族を呼び寄せている。しかし当時、厦門への移住者が増加したことから、同地の物価が急騰し、ここも諦めざるを得なかった。同一月には北京が解放されたが、豊子愷は「国内時局の悪化、国共和平交渉の成立の見込みがあまりにも無いこと、各地の物価高騰」などから、当時手がけていた『護生画集』第三集の完成後は上海に戻るか、あるいは香港に行くか、まだ決めかねていた。[30]

一九四九年四月上旬、豊子愷は香港へと向かった。それは章錫琛の提案にしたがって、当時香港に滞在していた葉恭綽（一八八一―一九六八）に『護生画集』第三集の題詞を筆写してもらい、また同地で個展を開いて今後の生活費を得るためであった。香港での目的を果たした後、豊子愷は四月末に香港から上海へ戻った。それは一つには、浙江省の出身で、上海での生活も長い豊子愷には同地に離れがたい特別な想いがあったからであり、また一つには中共地下党組織によって国民党特務の迫害から保護され、北京で活動していた旧友、葉聖陶からの提案のためでもあった。[31]

その後、豊子愷は一九四九年には中華全国文芸工作者代表大会の代表に選ばれ、五〇年七月には華東軍政委員会第二次会議に出席している。また、五四年からは中国美術家協会の常務理事や上海美術家協会の副主席に選ばれるなど、体制への参加を余儀なくされていく。

建国後に発表された『亦報』版の将校が人々に理想を語り、また多くの人がその実現を信じて将校を励ますという結末は、前述の共産党の独裁的状況を考えると、中国に残ることを選択した豊子愷にとって、そう書かざるを得ないものであったと言えようか。あるいは、豊子愷の新中国に対する期待の表れでもあろうか。

三　桃源譚としての「赤心国」

（一）時間と空間

以上、「赤心国」の概要について見てきた。その構成には、豊子愷が平素から好んでいた陶淵明（三六五―四二七）の「桃花源記」に類似した点が極めて多い。以下、類似点と相違点について検討する。

まず、時代設定であるが、「桃花源記」では「晋の太元中」とあり、『論語』版「赤心国」の「抗戦時期」と同様に、作者の生きていた時代である。[32] 一方、『亦報』版では「かつて、ある戦争の時」と曖昧になっている。また、場所は「赤心国」では『論語』版、『亦報』版のいずれも「海沿いの町」とあり、不特定であるが、「桃花源記」では湖南省洞庭湖の西に実在する「武陵」と記されている。

「桃花源記」において、時間および空間が陶淵明の生きていた「身近な世界」であることについて、一海知義は「物語が現実批判、現実風刺のトゲを内に秘めていることを暗示する」と述べている。[33] 一方、「赤心国」では上述のように、時間も空間もほとんど特定されない。しかし、これは「赤心国」が「現実批判、現実風刺のトゲ」を内包していないからではなく、むしろその「トゲ」が鋭すぎるからと言えるのではないだろうか。また、『護生画集』などの著作を通じて、心のあり様を問い続けてきた豊子愷にとって、「赤心国」はすべての人の心の奥底に存在しうる世界であったが故とも言えよう。

さて、「桃花源記」の主人公である漁師は舟で谷川を遡るうちに、気がつくと見慣れぬ谷間の奥にさまよいこんで

いた。川の両岸には一面に花盛りの桃の林が広がり、その奥には山があった。山には小さなほら穴が開いていて、その口からは光がさしているように見える。

「赤心国」の将校が敵機の爆撃を逃れるために、やむなくほら穴の奥へと進んで行ったのに対し、「桃花源記」の漁師は自らの意思によるという違いや、ほら穴の大小は異なるものの、山腹のほら穴の奥に別天地が広がっている点は同じである。

漁師は谷川を上って行くうちに、いつの間にどこまで来たのかわからなくなってしまう。その様子を示す「忘路之遠近（路の遠近を忘る）」という表現について、芳賀徹はこれは「空間的な隔り」と「かなりの時間の経過」の双方を含むとしたうえで、異次元あるいは非日常の世界へ入り込むには「たとえほんの束の間であろうと意志と意識の空白状態を経過するか、空間ないし時間のトンネルをくぐり抜けるか」が必要であり、「『忘路之遠近』はまさにそのような日常性からの離脱の過程を意味」すると論じている。[34]

一方、「赤心国」の将校は、ほら穴を抜けるまでの間、暗闇の中をほぼ一昼夜歩き続け、疲労困憊して倒れるように眠りにつき、目覚めたところで、ようやく出口へと続く一筋の光を見出す。詳細は異なるものの、将校もまた「意志と意識の空白状態を経過」し、「日常性からの離脱」を遂げたのである。

（二）「小国寡民」

次に、「桃花源記」に記された住民たちの暮らしぶりを見てみたい。「桃花源記」には「土地平曠、屋舎儼然、有良田美池桑竹之屬。阡陌交通、鶏犬相聞（土地は平らかにして曠（ひろ）く、屋舎は儼然として、良田美池、桑竹の屬（たぐ）いあり。

阡陌交り通じ、鶏犬相い聞こゆ）」とあり、平和で豊かな農村の風景が描かれている。[35] この最後の「鶏犬相聞」は『老子』（第八〇章）の描いた理想郷「小国寡民」の言葉である。この表現からも明らかなように、「桃花源記」が老子の「小国寡民」を想定していることは、これまでにも指摘されてきたとおりである。[36]

「小国寡民」では、人々は文明の利器や兵器を用いず、自給自足の原始的な共同生活をおくり、日々の暮らしに満足し、鶏や犬の鳴き声が聞こえるほどの近さに隣国があっても、往来はない。「桃花源記」の村での暮らしは、当時多くの村が戦乱で疲弊していたのに対し、この村が豊かで平和であること以外は、ほかの村々と何も変わらない。[37]

「赤心国」もまた、この「小国寡民」を髣髴とさせる世界である。ただ、「小国寡民」や「桃花源記」では、船や車などの文明の利器や兵器は、存在はするものの使用していないのに対して、「赤心国」ではこれらはそもそもはじめから存在していない。それは、「桃花源記」や「小国寡民」とは異なり、「赤心国」がいわゆる「人間」以外の存在によって構成されているからである。自他の区別がなく、善良で慈悲にあふれ、質素な生活に満足を覚えている彼らにとって、文明の利器や兵器はそもそも不要なのである。

川合康三は、中国古代の理想郷である華胥氏の国について論じるにあたり、「感情は人間のあらゆる苦悩、懊悩の根源であるとともに、人間であることを保証するもの」であり、また「人は人である限り、本質的に苦悩、懊悩を免れない存在」であるとしたうえで、「華胥氏の国の人々が人として持つはずのさまざまな要素を持たないことは、（中略）人間であることの否定にまで行き着いてしまう」と述べている。[38]

豊子愷が「赤心国」の人々を「人間」とは異なる容貌に設定したのは、上述の川合康三の言うように、「人間」ならば当然に持つはずの「苦悩、懊悩」から免れ、その根源となる「感情」を持たない存在とするためであったのかも

しれない。彼らはまた、「桃花源記」の登場人物がそうであったように、誰も社会のなかで「一人の人間を特定する最小限の要素」である名前と年齢を持たない。これもまた、彼らが「この世の秩序の埒外に生きる人」であることを示していると言えよう。[39]

（三）求めるべき場所

「桃花源記」では、漁師は数日楽しく過ごした後、自らの意思で同地を後にする。住民に口止めされたにも関わらず、漁師はその存在を太守に報告し、探索が開始されるが、漁師や太守も、また「高尚の士」である南陽の劉子驥（りゅうしき）も同地を訪れることはできなかった。

これについて伊藤直哉は、同地は「地上のどこか」にではなく、人々の「魂の奥底に存在」するものであり、同地を「心の外に求めよう」としても求めることはできないと述べている。また、漁師が桃源郷を訪れることができたのは、彼が谷川を遡るうちに意図せずして「無我の境地」に至ったからであり、桃源郷は「『探す』という主体的努力」を放棄してはじめて現れるのだという。[40]

尚、「桃花源記」にそえられた「詩」[41]には、最後に「借問游方士、焉測塵囂外、願言躡軽風、高挙尋吾契（借問す、游方の士、焉ぞ塵囂（じんごう）の外を測らん、願わくは言（ここ）に軽風を躡（ふ）み、高挙して吾が契を尋ねん）」とある。これについて、邊土名朝邦は「桃源郷を俗世の外に物質的所在として探すよりもわれわれの各自の心中に、何ものにもとらわれない遊心＝自由精神にこそ求めるべきだと読める」としたうえで、「俗用であくせくしている現代のわれわれが、ひとときでも俗心を忘れることができたならば、桃源郷を垣間見るぐらいのことはできるかも判らない。その意味では、桃

源郷は『どこにでもある』と言えるのである」と論じている。[42]

さて、「赤心国」では、前述のように不慮の事故が原因で、将校は意に反して同地を追放される。将校もまた「桃花源記」の漁師と同じく人々に「赤心国」の話をし、同地を探しに行きたいと思う者も現れるが、実現しない。ここで、「桃花源記」との相違は、主人公である将校本人が赤心国を再び探し求めようとしない点である。「桃花源記」では、漁師は同地へ再び戻ることを期待して、道のあちこちに印を残している。「赤心国」の将校は、ただ人々にその存在を語るだけで、自らは探したいとも、また戻りたいとも思わない。それは、赤心国への陸側の唯一の入り口であった洞穴が爆撃で崩れ去った今、同地へ戻ることが不可能に近いからでも、また将校が赤心国を追放された身の上だからでもない。将校の関心は「赤心国」そのものや、自分だけが「赤心国」に戻ることにあるのではなく、自分たちの世界を「赤心国」のような理想郷、自他の区別がなく、慈悲にあふれた穏やかで平和な世界にすることにあるのである。そして、将校はまた、「赤心国」が桃源郷と同様に、「地上のどこか」や「心の外」にではなく、「魂の奥底」に存在することを、そしてそれは「無我の境地」に至った時にだけ現れることを知っているからなのである。

（四）赤心と童心

上述のように、「赤心国」は普段は「魂の奥底」に隠されていて、そこに至るには「無我の境地」になることが必要であった。豊子愷はそのためには、人は芸術と宗教を志向すべきであると説いた。これは、弘一法師と並んで、豊子愷が生涯、師と仰いだ儒学者、馬一浮（一八八三―一九六七）の教えによる。馬一浮の唯心論の影響を受け、豊子愷もまた理想の境地を現実とは別の世界に求めるのではなく、現実世界に身を置いたまま、心のうちに理想郷を求め

ようとした。豊子愷は戦争中に公開日記という形で、疲弊する国民に向けてメッセージを送り続けたが、その中の一節には「理知と実利の世界の外に、視野を別に広げることができれば、世間の万象は常に新しく、至る所これみな美の世界である」と記されている。[43]

豊子愷は芸術と宗教によって「俗念を放棄して、しばらくでも塵界を離れた心持ち」[44]になることを願った。この「俗念を放棄して……」という文は、豊子愷が最も好んだ作家の一人である夏目漱石の『草枕』の一節である。[45]これについて、豊は文革中に秘密裏に執筆した散文「しばらく塵界を離れる」の中で、次のように記している。

苦痛、憤怒、騒動、慟哭は人の世に付随したもので、人はそれから逃れることは無論不可能である。しかし、「しばらく」という二文字に注意して欲しい。「しばらく塵界を離れる」ことは楽しく、安らかで、心の滋養になるのだ。[46]

豊子愷にとって、芸術と宗教は「しばらく塵界を離れる」のに不可欠の要素であったが、こうした助けなしに、そのまま容易に「赤心国」に遊べる存在があった。それは児童であり、童心をもった人間である。

豊子愷は「理知と実利の世界の外に、別の世界を開く」ことで、「しばらく塵界を離れた心持ち」になることが生活の芸術化であると認識していたが、それは清の項廷紀の「憶雲詞」の一節「不為無益之事、何以遣有涯之生？（無益な事をせずして、限りある生涯を過ごすことが出来ようか？）」という境地でもあった。豊子愷の説明によると、この「無益な事」とは「利害や打算のためではない事」であり、「感情、気概、興趣の要求から行う事」であった。豊子愷は、この項廷紀の言葉には「人生の究極の理」があると述べている。[47]この「感情、気概、興趣」と人間の生活について、豊子愷はまた次のように言う。

すべてが実利や打算のためと言うのは、換言するならば、すなわち目先の利益しかないことである。それが極端になると、身を持するに感情や気概、興趣が完全に失われ、人はひからびて活気がなく、冷酷で非情な、一種の動物に変わってしまう。これはもはや〝生活〟ではなく、一種の〝生存〟に近い[48]。

豊子愷は、児童とは自己の「感情、気概、興趣」の要求のままに行動する存在であり、利害や打算のためにそれらを抑制して生きる大人とは完全に別の世界の存在と考えていた。豊にとって、子どもはこの世で最も正直な人間であり、また子どものように「常に少しも包み隠すことのない真心」の持ち主こそが理想的な人間であった[49]。

豊子愷は一九二七年の散文「子どもから得た啓示」において、子どもは「世間の物事の因果関係の網を撤去し、物事それ自体の真相を見ることができる」ので、「創造者であり、またすべての物事に生命を与えることができる。彼らは〝芸術〟という国の主人である」と記している[50]。

この、子どもは「物事それ自体の真相を見ることができる」という点について、豊は翌一九二八年の散文「子どもたち」でも、次のように記している。

この世で最も健全なる心眼は、子どもにしか持てない。この世の万物の真相は、子どもだけが最も明確に、そして最も完全に見ることができるのだ。私は彼らと比べたら、真の心眼は既に世俗の智慧や煩悩で覆い隠され、損なわれてしまっている[51]。

豊子愷は一九二七年に弘一法師による仏教帰依式を受けており、熱心な仏教徒として知られるが、この「世俗の智慧や煩悩」によって心眼が覆われるという考えは『大乗起信論』に由来する。『大乗起信論』では、人間の一切の迷いの世界と悟りの世界は心が編み出したものであると説くが、馬一浮の唯心論もこれに依拠している。人間の心は本

来、正常無垢な「真の心眼が開かれた状態（「真如」）にあり、自由である。ところが、何かのきっかけで心が「無明」に支配されると、執着が生じる。「無明」とは人生や事物の真相に明らかでないことをいう。この「無明」により固執の念（「我見」）が生じることで、様々な煩悩が引き起こされるのである。しかし、どのように深い「無明」に閉ざされていても、人間の心には「真如」に戻る力が存在するというのが『大乗起信論』の根底を流れる思想である。[52]

豊子愷の児童崇拝の背景には、以上のような『大乗起信論』の教えが存在すると考えられる。豊子愷は、子どもは大人のような世俗の智慧（「分別智」）を持たないが故に、人間の心に本来備わっている「真如」を保ちうる、理想的な存在であると考えていた。子どもは「無分別智」の状態にあるが、これは対象を言葉や概念で分析的に把握しようとせず、また主体と客体を区別しようとしないことを指す。そのような状態にあるからこそ、子どもは世俗を離れて物事の本質を見ることができるのであり、また一切の事物に共感を抱くことができるのである。

それに対して、大人は「分別智」によって「真如」が曇り、覆い隠された状態にある。それを取り除く手段として、豊子愷が提唱したのが芸術と宗教であった。豊子愷は、子ども時代こそが人生の黄金時代であり、それを過ぎてしまった大人がその「幸福で仁愛にあふれ、平和な世界」に戻るには芸術的修養が重要であると述べている。[53] 豊はまた、『孟子』に基づいて、赤子の心を持つ大人（おとな）はすなわち大人（たいじん）であり、大人（たいじん）だけが世界の真相や人生の正道を見ることができると述べ、また大人（おとな）の事業や活動のなかで赤子の心に近いのは芸術と宗教のみであるともいう。[54]

尚、ここで一つ注意しておきたいのは、豊子愷は決して子どもの現実の姿そのものを純真無垢な存在として理想化した訳ではない点である。一例として、長女陳宝（阿宝）について綴った散文「阿宝を黄金時代から送り出す」を見てみたい。豊子愷はそれまで豊家の暴君的存在であった陳宝が好物のチョコレートを兄弟に分け与え、兄弟の喜ぶ様

子に満足するのを見て、陳宝にも「黄金時代」を去る時が来たことを知る。豊は、陳宝がそれまで我侭いっぱいで、大人やほかの兄弟の思惑に少しも頓着せず、自分の感情のままに行動する姿に頭を抱えながらも、その我侭を尊重し、また愛していたのである。[55] 豊は実際に多くの子どもに囲まれて暮らしており、子どもが決して純真無垢で、天使の様な存在ではないことは十分に承知していた。豊子愷が子どもを理想としたのは、まさにその感情に忠実な点であり、世俗の智慧で真の心眼が曇らされていない点にあった。

この意味において、豊子愷の児童観は、明末の思想家、李卓吾（一五二七―一六〇二）の童心説につながるものである。「童心」という言葉に、日本人は往々にして「純粋・無邪気・無垢……」といった清らかな美しさや、「富貴貧賤にとらわれないひたむきな誠心」をイメージしがちである。しかし、李卓吾の説く「童心」は、これとは少し異なっている。[56]

李卓吾によると、人は生まれながらに童心を有するが、成長して道理や見聞、世間的な知恵や知識が増えるにつれ、童心は阻害され、ついには失われる。人は童心を失うことで、真心を失い、真人ではなくなる。[57] つまり、李卓吾の言う童心とは、「生存欲や物質欲などの赤裸々な実存の心」であり、[58]「すべての既成の価値、規範を拒否」した「人間の根源的本質、人間たる所以」なのである。[59]

「赤心国」の住民は、人を疑うことを知らず、一見したところ天真爛漫で純真無垢である。しかし、将校には自分たちに災いをもたらす可能性があると判断してからは、その対応は冷酷なまでに厳しい。彼らは道徳や同情といった「既成の価値、規範」にとらわれることなく、自分たちの気持ちに正直に、自分たちの生存を最優先するのである。これはまさに、豊子愷が子ども時代の陳宝に認めた長所であり、『大乗起信論』で説くところの「真如」の状態である。

おわりに

小論では、豊子愷の「赤心国」につき、一九四七年の『論語』版と一九五〇年の『亦報』版の相違を明らかにし、また陶淵明「桃花源記ならびに詩」と比較することで、豊子愷が理想とした世界や心のあり様について検討した。

中国において、「桃花源記」は時代に応じてさまざまに受容され、また王維や韓愈、王安石など、さまざまな桃源譚が作成された[60]。豊子愷の「赤心国」もまた、その系譜を受け継ぐ作品である。

前田愛の指摘するように、「『草枕』の世界が桃源郷のトポスをかりている」ことはよく知られており[61]、『草枕』を一種の桃源譚とする解釈も多い[62]。また、『草枕』を解く言葉が「非人情」であることも周知のとおりである[63]。この「非人情」とは、「神の知らぬ情で、しかも神に尤も近き人間の情[64]」であり、「現実を断念して、美的観照に徹した世界」である[65]。これは、まさに豊子愷が「赤心国」で描いた世界である。そのほかにも文明批評、戦争批判などの点においても、『草枕』が「赤心国」の構想に影響を及ぼしたであろう点がいくつか見られる。

また、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』第四篇「フウイヌム渡航記」には、すべての罪悪や病気、欠点から解放された、平和で幸福な国家が描かれているが、その住民は人間（ヤフー）ではなく、高度な知性と徳性を兼ね備えた馬（フウイヌム）である。「赤心国」の住民が「野人」のような風貌と人間よりも高い徳性をもつことや、その社会には権力や政府、戦争、刑罰がないことなど、同書が「赤心国」の構想に何らかのヒントとなった可能性も考えられよう。尚、豊子愷の旧居を再建した「緣緣堂記念館（浙江省桐郷市石門鎮）」には、豊子愷の旧蔵書の一部が保管さ

れているが、そこには英漢対照の『ガリヴァー旅行記』（伍光建選訳『Gulivers Travels 伽利華遊記』商務印書館、選訳者による「作者略伝」は一九三三年、奥付なし）が含まれている。[66]

「赤心国」と『草枕』および『ガリヴァー旅行記』との関連については、また稿を改めて論じたい。

1　豊子愷は一九三七年一一月に故郷の浙江省石門湾を離れて以降、一九四七年に上海に戻るまで、約一〇年間、以下の九省で疎開生活をおくった。【一九三七】浙江省（南聖浜・桐廬・蘭溪・衢州・常山）、江西省（上饒）、【一九三八】江西省（上饒・萍鄉）、湖南省（湘潭・長沙）、湖北省（漢口）、湖南省（長沙）、広西省（桂林）、【一九三九】広西省（桂林・宜山・思恩）、貴州省（都匀・遵義）、【一九四〇―一九四一】貴州省（遵義）、【一九四二】貴州省（遵義）、四川省（重慶）、【一九四三―一九四五】四川省（重慶・瀘州・楽山）、【一九四六】四川省（重慶・広元）、陝西省（宝鶏）、河南省（開封・鄭州）、湖北省（武漢）、江蘇省（南京）、上海、浙江省（石門湾・杭州）。

2　豊子愷には夭逝した者を含めて、以下九名の子どもがいた。疎開の際には、当時生存していた子どもは皆、豊子愷と行動をともにした。長女陳宝（一九二〇生）、次女宛音（一九二一生）、三女寧馨（豊子愷の姉、豊満が離婚後に出産した子どもで、豊子愷一家の下で育てられ、苗字も豊を継いだ。一九二二生）、三女三宝（一九二二―一九二四。三女の三宝は夭折したため、代わって上記の寧馨が三女とされた）、長男華膽（一九二四生）、次男阿難（死産、一九二四生）、三男奇偉（一九二六―一九二九）、四男元草（一九二七生）、四女一吟（一九二九生）、五男新枚（一九三八生）。

3　豊陳宝・豊一吟『爸爸的画』第四集、香港・三聯（香港）有限公司、二〇〇一年、一一七頁。

4　『博士見鬼』（一九四八）に収録されたのは、これら二作ではなく、一九四七年九月二二日『天津民国日報』に掲載された「明心国」という作品である。豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』では、「明心国」が『論語』版「赤心国」に類似していることから、

同文集に採録した『博士見鬼』では「明心国」に代えて、『論語』版「赤心国」を収録している。豊陳宝・豊一吟編『豊子愷文集』第六巻（浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九六年、二八四―三〇〇頁）。

5　小論では、『論語』版「赤心国」については『論語　半月刊』影印版（香港・波文書局、七一三―七五〇頁）を、『赤報』版については豊陳宝等編『豊子愷漫画全集』第七巻（二〇〇一年、北京・京華出版社、二三五―二六六頁）をそれぞれ参照する。

6　「赤心国」が発表された第一三四期（一九四七年）当時の社名は上海時代書局であるが、社主は同じく邵洵美である。

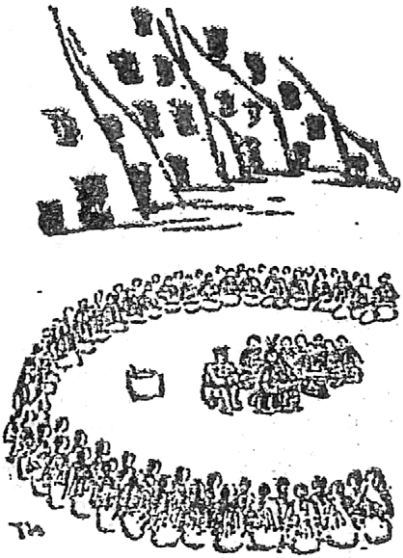
7　唐大郎ら編集部は、豊子愷の児童漫画が戦前から人気を博していたことに着目し、豊に『児童雑事詩』への挿絵を依頼した。豊子愷は著者の東郭生が周作人であることを承知の上で引き受けたが、周作人は自らの詩に豊子愷の絵が添えられることを事前に知らされてはいなかった。編集部の予想どおり、『児童雑事詩』全七二首のうち六九首に添えられた豊子愷の漫画は好評で、『児童雑事詩』は豊の挿絵とともに評判を呼んだ。しかし、周作人は豊子愷の漫画によい印象を抱いていなかったため、自らの承諾なしに豊の挿絵が添えられたことに不満を抱いていた。周作人が晩年に香港の鮑耀明に宛てた手紙には、そのあたりの事情や不満が吐露されている。鮑耀明編集『周作人晩年書信』香港・真文化出版公司、一九九七年。

8　余斌「〝専欄作家〟周作人」
http://mjlsh.usc.cuhk.edu.hk/book.aspx?cid=6&tid=157&pid=2883
（二〇一四年一〇月五日参照）。

9　豊子愷「一飯之恩 避寇日記之一」『少年先鋒』第六期（一九三八年五月五日）、三〇頁。

10　Chang-Tai Hung, “War and Peace in Feng Zikai’s Wartime Cartoons”, Modern China 16: 1 (January 1990): pp.69-71.

11　豊子愷のイラストによると、「野人」の住居は黄土高原によく見られる横穴式住居（窰洞）を髣髴とさせるものである。「赤心国」を創作するにあたり、豊子愷が中国共産党の根拠地、陝西省延安をイメージしていた可能性も考えられるが、ここでは触れない。［図版⑧］



【図版⑧】

【図版⑨】

12　中国最古の地誌『山海経』の巻九「海外東経」、巻一七「大荒北経」、『淮南子』巻四「墜形訓」などには、全身を長毛で覆われた「毛民」の国に関する記載が見られる。また、『太平御覧』巻七九〇「四夷部」一一の「毛民国」には、「毛民」は穴に暮らし、衣服を身に着けないと記されている。「赤心国」の「野人」は棕櫚の服を身に着けており、また「毛民」とは主食も異なるが（「野人」はジャガイモ、「毛民」は黍）、豊子愷が「野人」の外貌を考案するにあたり、「毛民」のイメージに影響を受けた可能性も考えられる。［図版⑨］

13　『亦報』版では、他人に害を加えると、加害者は「心」を失い、ほかの人々の「心」にも歪みが生ずる。その後、悪事を正直に認めれば、加害者の「心」は恢復し、人々の「心」も正常に戻る。『論語』版には、このような記述は見られない。豊子愷「赤心国」、豊陳宝等編『豊子愷漫画全集』第七巻、二〇〇一年、北京・京華出版社、二五八頁。

14 金谷治訳注『論語』岩波書店（岩波文庫）、二〇〇四年、一二三―一二五頁。下線部は大野による。

15 匡互生「立達、立達学会、立達季刊、立達中学、立達学会」、北京師範大学校史資料室編『匡互生与立達学園』北京・北京師範大学出版社、一九八五年、二五―二八頁。

16 同上、二四頁。

17 魏鳳江「従春暉中学到立達学園的匡互生先生」、同上『匡互生与立達学園』一九三頁。

18 匡互生は一九二六年に支援者の寄付によって、上海北部の宝山県大場郷（現、宝山区大場鎮）に土地を得ると、立達農場とした。一九二九年には農場を上海西北の南翔（現、嘉定区南翔鎮）の広大な土地に移し、同地に高級中学部農村教育科を開設した。「附録　立達学会及其事業」『一般』誕生号（一九二六年九月五日）一五六頁。柳子明「匡互生先生印象記」同上、一三一―一三二頁。蔡端「匡互生和立達学園」、同上、一七一―一七二頁。

19 豊子愷「赤心国」、豊陳宝等編『豊子愷漫画全集』第七巻、二五〇頁。

20 同上、二五二頁。

21 当時、大同思想は伝統派だけではなく三民主義者や共産主義者、そして特に無政府主義者の間で流行していた。そのため中国の無政府主義思想は、当初から大同思想を内に含んでおり、匡互生もまた例外ではなかった。玉川信明『中国アナキズムの影』三一書房、一九七四年、四五頁。

22 豊子愷「東京某晩的事」、前掲『豊子愷文集』第五巻、一二八―一二九頁。

23 豊子愷「全人類是他的家族」、同上、第五巻、六八一頁。

24 同上、二五三頁。

25 同上、二五四頁。『論語』版では、単に「装飾品」。

26 同上、二五七頁。

27 『護生画集』は豊子愷が、南山律宗の第一一代祖師である弘一法師（一八八〇―一九四二。一九一八年に出家、俗名は李叔同）の発案、指導の下、一九二九年から七三年まで四五年もの歳月をかけて完成させた啓蒙書で、全六集、計四五〇幅の絵と題詞から成る。

28 小島晋治・丸山松幸『中国近現代史』岩波新書三三六、岩波書店、二〇〇一年、一九〇―一九一頁。

29 豊一吟「豊子愷在台湾的日子」、鐘桂松・葉瑜蓀編『写意豊子愷』杭州・浙江文芸出版社、一九九八年、三一三―三一四頁。

30 豊子愷「致広洽法師　一八」（一九四九年二月一日）、「同　二〇」（一九四九年三月二六日）、前掲『豊子愷文集』第七巻、二〇三―二〇四頁。

31 盛興軍主編『豊子愷年譜』青島出版社、二〇〇五年、四四五頁。

32 晋の太元年間は西暦三七六―三九六年で、陶淵明の生きていた時代である。

33 一海知義「Ⅰ　陶淵明―虚構の詩人」『一海知義著作集』第二巻、藤原書店、二〇〇八年、一八頁。

34 芳賀徹「桃源郷の詩的空間（一）」『比較文学研究』第三二号、一九七七年一一月、九頁。

35 「桃花源記ならびに詩」の原文、書き下し文は、一海知義「陶淵明詩文集」（『一海知義著作集』第一巻、藤原書店、二〇〇九年、五八四―五九七頁）などを参照した。

36 一海知義、前掲「Ⅰ　陶淵明―虚構の詩人」二一―二二頁。邊土名朝邦「桃源郷―中国的ユートピア世界―」、井口正俊・岩尾龍太郎編『異世界・ユートピア・物語』九州大学出版会、二〇〇一年、一五八頁。伊藤直哉『桃源郷とユートピア』春風社、二〇一〇年、一七一―一七三頁。

37 「桃花源記」の村の人々の服装については、原文「男女衣著、悉如外人」の「外人」を「外国人」や「見慣れぬ人」とするか、「桃源郷の外部の人々」とするか、諸説分かれるが、ここでは論じない。川合康三『桃源郷　中国の楽園思想』講談社、二〇一三年、一七二―一七四頁。一海知義「外人考―桃花源記瑣記」、前掲『一海知義著作集』第二巻、二二―二四頁。伊藤直哉、

前掲書、一六三―一六四頁。

38 川合康三、前掲書、一〇六頁。

39 同上、二〇頁。

40 伊藤直哉、前掲書、一七七―一七八頁。

41 「桃花源詩」については、陶淵明の作ではないとする説もあるが、ここでは論じない。伊藤直哉、前掲書、一六七―一七〇頁。川合康三、前掲書、一七八頁。

42 邊土名朝邦、前掲論文、一六七―一六八頁。

43 豊子愷「教師日記」（一九三九年三月一三日）『宇宙風（乙刊）』第二九期、一九四〇年九月一六日、三八頁。

44 夏目漱石「草枕」『漱石全集』第三巻、漱石全集刊行会、一九三六年、一二頁。

45 豊子愷は『人間世』による一九三四年の愛読書調査に対して、「板垣鷹穂著各種芸術論」「楽府詩集」とともに「漱石全集」を挙げている。「新年附録　一九三四年我所愛読的書籍」『人間世』第一九期、一九三五年一月五日、六七頁。また、豊子愷は夏目漱石の『草枕』を一九五六年、七四年と二回にわたって翻訳している（中国語名『旅宿』）。

46 豊子愷「暫時脱離塵世」、前掲『豊子愷文集』第六巻、六六二頁。

47 豊子愷「謝謝重慶」、同上『豊子愷文集』第六巻、一七七頁。

48 同上。

49 豊子愷「子愷随筆（三）」、『一般』一九二七年二月号、二一七頁。

50 豊子愷「従孩子得到的啓示」、前掲『豊子愷文集』第五巻、一二二―一二四頁。

51 豊子愷「児女」、同上、一一四頁。

52 平川彰『佛典講座二二　大乗起信論』大蔵出版、一九八二年、六九―八〇頁。

53 豊子愷「美与同情」、前掲『豊子愷文集』第二巻、五八四頁。
54 『孟子』「離婁章句下一二」の「孟子曰、大人者、不失其赤子之心者也」（孟子が言われた。大人（たいじん）（大徳の人と言われる程の人物）は、いつまでも赤子のような純真な心を失わずに持っているものだ）という一節に由来。小林勝人訳注『孟子（下）』岩波書店、一九九六年、七三―七四頁。
55 豊子愷「送阿宝出黄金時代」、前掲『豊子愷文集』第五巻、四四六―四五〇頁。
56 溝口雄三『中国の人と思想 ⑩李卓吾』集英社、一九九五年、二二三、二二八頁。
57 李卓吾『焚書』巻三「童心説」、中華書局、一九七四年。
58 溝口雄三、前掲書、二二八頁。
59 劉岸偉『明末の文人 李卓吾』中公新書一二〇〇、中央公論社、一九九四年、一五八頁。
60 川合康三、前掲書、一八二―一九九頁。
61 前田愛「世紀末と桃源郷 『草枕』をめぐって」『思想』第六二二号、一九八五年三月、二〇五頁。
62 橋本尚喜「桃源郷からの遡行 夏目漱石『草枕』研究の陥穽、「鶉籠」序に関する一考察」『教職教育研究 教職教育研究センター紀要』第一一号、二〇〇六年三月、五五頁。
63 米田利明「『草枕』と『故郷』―楽園喪失をめぐって」、伊藤虎丸、祖父江昭二、丸山昇編『近代文学における中国と日本―共同研究・日中文学関係史』一九八六年、汲古書院、一八一頁。
64 夏目漱石『草枕』（一〇）。
65 米田利明、前掲論文、一八六―一八七頁。
66 西槇偉「豊子愷の『緣緣堂蔵書』について 付録『緣緣堂蔵書目録』（西槇偉・林素幸・呉衛峰）」、熊本大学『文学部論叢』第百号、二〇〇九年三月、二七四頁。ただし、豊子愷旧蔵の『Guliver's Travels 伽利華遊記』に第四篇が含まれているかなど、

詳細は不明である。

図版出典

【図版①】豊子愷「赤心国」（『亦報』版）、豊陳宝・豊一吟『爸爸的画』第四集、二三六頁。
【図版②】同上、二四三頁。
【図版③】同上、二五一頁。
【図版④】同上、二六一頁。
【図版⑤】同上、二六四頁。
【図版⑥】同上、二六六頁。
【図版⑦】豊子愷「赤心国」、『論語　半月刊』、六七一〇頁。
【図版⑧】同上、六七〇四頁。
【図版⑨】馬昌儀『全像山海経図比較』第六巻、北京・学苑出版社、二〇〇三年、一一三六頁。

A Story of the Peach Blossom Spring: the *Chixinguo* of Feng Zikai

by Kimika Ono

Feng Zikai 豊子愷 (1898-1975) was a leading Chinese intellectual of the modern period widely known for works such as *Zikai's Cartoons* (*Zikai manhua* 子愷漫画), illustrations in his own distinctive style, and *Jottings from the Yuanyuan Studio* (*Yuanyuantang suibi* 緣緣堂随筆), a collection of occasional essays (*suibi*). The subject of present article is *Chixinguo* 赤心国, a story in his only published collection of children's tales, *Boshi jian gui* 博士見鬼(1948).

During the war, Feng fled his hometown with ten of his family members and over the next ten years lived at various places in China. *Chixinguo* was written when he was living in Guizhou 貴州,between 1939 and 1942, one of a collection of nursery tales devised as a means to teach his children the national language.

After the war, the story first appeared in the journal *Runyu* 論語(No. 134; August 1, 1947) and then again in serial form in *Yibao* 亦報 from July 1, 1950. Though there are slight differences between the two in details of the story and in expression, they closely resemble one another in outline. They are a version of the story of the *Peach Blossom Spring* (*Taohuayuan ji* 桃花源記) by Tao Yuanming 陶淵明 - an army officer who found shelter from the bombing in a cave discovered in its depths a utopia called Chixinguo. However there are great differences between the two versions in terms of the personality of the characters, the details of the incident that became the cause to forcibly deport the officer to the real world and his behavior following that return. These differences may be thought to emanated from what was taking place between 1947 and 1950.

Chixinguo is a society where people help one another, where mutual respect is based on mutual dependence. Leaders exist, but their role is based only on

their function and the inhabitants themselves are all completely equal. The form of organization of this settlement greatly resembles the ideals of the Li Da Academy 立達学園 that Feng set up jointly with Kuang Husheng 匡互生 and others in 1925. Moreover, there is no distinction between self and others in Chixinguo, and all share their feelings with one another. This is thought to show the influence of Kuang Husheng's ideas of the "great unity" (datong 大同).

Chixinguo continues the utopian theme developed by Tao Yuanming in his *Plum Blossom Spring* of 412. For Feng, Chixinguo, like the Peach Blossom Spring, is usually concealed "within the depths of the spirit". It is a place only reached when a person attains a state of non-self. Feng advocated art and religion as the means by which this state might be reached.